

歴史館だより



- 古河藩土井家における鮭延越前とその家来達について
- 義光はなぜ「虎将」と呼ばれてきたのか
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No.6
- Yamagata三昧「もう一つの山寺」
- 研究余滴⑩「山形城の立地」

No.23
2016年3月発行



最上義光歴史館

古河藩土井家における 鮭延越前とその家来達について

早川和見

元和八年八月最上家改易事件後、山形藩主最上義俊の重臣達は全国の諸藩に身柄を預けられている。老中土井利勝（下総佐倉藩主）には、鮭延越前秀綱、新関因幡久正の二名が預けられた。この小論においては、最上家重臣鮭延越前が土井利勝に預けられた後に、その家臣として召し出されているが、これらの経緯について古河藩土井家史料を中心に、紙数の許す範囲で考察してみたいと思う。

鮭延越前秀綱、新関因幡久正の両氏は元和八年八月の最上家御家騒動後、土井利勝に身柄を預けられた。この期間の出来事については、鮭延秀綱の庶子で、後に同家来に列した森川弥五兵衛の子孫が遺した森川系図によれば、秀綱は幕命により預期間中は江戸本郷宿に身を寄せており、妻、嫡男秀義に先立たれており全くの单身状態であり、身の回り世話をする者もなかったという。このため自身の身の周り世話のため、在郷の娘を雇い入れている。

秀綱はこの在郷の娘との間に元和九

年男児を設けている。しかしこの男児は嗣子とせず、出生地に因んで『森川』姓を名乗らせ秀綱側で引き取っている。この男子は後に寛永一〇年古河城下で元服、森川弥五兵衛と称し、秀綱の家来に列している（拙著 山形最上家と古河土井家について）。もう一方の新関因幡については全く何も伝えられていない。同氏も鮭延氏同様で、一時江戸本郷宿に居住していたのであろうか。

元和八年土井利勝に預けられた鮭延越前秀綱、新関因幡久正の両名の預期間はほぼ一年であって、翌九年には正式に御赦免となったが、その行き先が注目されたのであった。

この時二代將軍秀忠に鮭延秀綱に対し、二男駿河大納言忠長の附家老で招聘しようとしたが、これには秀綱自身が固辞したと伝えられる。その後、鮭延秀綱と將軍秀忠、土井利勝との間でのような遣り取りが展開されたのかは伝えられていない。しかしその後將軍秀忠は、腹心の土井利勝に対して知行五、〇〇〇石で、鮭延秀綱を召し抱え

るように命じたことが、近年研究から明らかとなっている（拙論 最上家改易事件に関する一考察 野木神社秘蔵史料を中心に）。これは古河郷土史研究会報三二号）。

これは元和九年当時、老中土井利勝は下総佐倉藩主で知行六五、二〇〇石であったため、この身代ではとても鮭延氏を知行五、〇〇〇石で召し抱えることは事実上困難であったことは、二代將軍秀忠自身も事前に承知していた。そこで鮭延氏の知行五、〇〇〇石分は召し抱えると同時に、別途これと同高を將軍が増増するという事で、利勝も了承したことが分かっている（拙論 鮭延越前研究ノート(4) 古河藩土井家時代の鮭延越前について 古河郷土史研究会報四九号）。

なお新関因幡久正も同時に土井利勝は知行一、〇〇〇石で召し抱えているが、これには將軍秀忠はこれに了承のみで特に介入していない。

この時鮭延氏は知行五、〇〇〇石で待遇は客人分で、一方の新関氏は一、〇〇〇石で御組頭（家中では家老の次ぐ要職）であった（拙著 山形最上家と古河土井家について）。

この当時の土井利勝家臣団は戦国時代の軍事形態を色濃く残しており後世の藩経営を主体とした藩体制とは大きく異なる。城代は藩主利勝の同母弟の土井内蔵元政で知行三、〇〇〇石、筆頭家老は寺田與左衛門



鮭延越前墓所

時岡二、〇〇〇石で、この二名がまさに利勝の腹心で、利勝に対する影響力も行使できる人物でもあった。この当時の土井利勝の主要家臣数は知行一〇〇以上の者が一二〇名前後とみられている。当時はまた戦時体制が色濃く、その家臣のほとんどが平士級で三〇〇石未満であった（拙論 土井利勝研究ノート(7) 老臣寺田與左衛門について 古河郷土史研究会報四四号）。しかし残念ながらこの当時の分限帳は伝えられていない。利勝の家臣団・藩体制が大きく変貌するのは、寛永二年九月に知行高が一挙に倍増となる一四二、〇〇〇石となったからのもので、これに伴い利勝は、自弟の土井内蔵元政には三、〇〇

○石から八、〇〇〇石へと、筆頭家老寺田與左衛門時岡が二、〇〇〇石から六、〇〇〇石へと大幅な加増を行っている。ここに至って土井家内では、鮭延氏の五、〇〇〇石を超えるものが出現して来たのである。この時新聞氏の役職は組頭のままであるものの、一、〇〇〇石から一、八〇〇石へ、さらに二、三〇〇石へと加増されている(拙著「山形最上家と古河土井家について」)。

実はこの時点で主要家臣のほぼ全員が大幅加増になったことと、家臣団の役職が藩経営に即応した複雑細分化なものとなり、藩士の階層も一斉に多極化していった(拙論「土井利勝研究ノート(7) 老臣寺田與左衛門について 古河郷土史研究会会報四四号」)。

これらの現象を前提にして近年、鮭延越前秀綱が元和九年から没する正保三年六月まで、実に二三年の間(土井家自身知行高の変遷や藩主の交代などもあり)、秀綱自身の役職も「客臣」のまま、しかも知行「五、〇〇〇石」もそのまま全く変更されなかったのは、新聞因幡が加増されたことをみても、真に奇異なことと言えるであろう。

これは土井利勝が鮭延氏を召し抱えるに当たり、当時の二代將軍秀忠が仲介し指示したこともあって、これを召し抱えた土井家一存のみでは、

勝手に変更が困難であったことと解釈される(拙論「鮭延越前研究ノート(4) 古河藩土井家時代の鮭延越前について 古河郷土史研究会会報四九号」)。

鮭延秀綱の晩年は、嫡男秀義が最上家出仕時代に早世したため嗣子がおらず、さらに元和九年に男子を設けたが嗣子とはせず、元服後家来に列し「森川」姓を名乗らせている。嫡男秀義は既婚したことから男子(秀綱の内孫)がおり、この嫁と孫も秀綱とともに古河城下大堤にいたことも今日分かっている。古河城下の秀綱には、嫡男秀義の遺児が健在であったが「籠宮」姓を名乗らせ別家としていた(拙論「鮭延越前研究ノート(2) 籠宮家について 古河郷土史研究会会報37号」)。秀綱は自ら意思により当代で絶家としたが、古河時代周囲には出羽時代からの家来達はそのまゝ扈從し続けた者たちがおり、土井家へ陪臣として奉公していた。

秀綱は正保三年六月古河城下にて八十四歳にして没。その屋敷跡には家来

達の手で菩提寺『鮭延寺』が創建され、同寺も秀綱の墓碑も現存している(拙著「山形最上家と古河土井家について」)。

恐らく秀綱の家来十四名にとっては、主君鮭延秀綱が土井利勝のもとに召し出された元和九年から正保三年六月に主君鮭延氏が没したまでの、家来達は土井家には陪臣として奉公したが、これがある意味で最も寛いだ充実した期間でなかったか想像している。秀綱の家来一四名は主君鮭延氏死去後、土井家と予てよりの約束通り正保三年七月一五日古河藩主土井利隆(一三五、〇〇〇石)に直参として召し出されている。

この時十四名の家来の中では、岡野九郎左衛門が家老であったことから、土井家ではこの家格をそのまま認め彼のみ三〇〇石鍵奉行で遇し、残りの十三名は二〇〇石から一五〇石は平士級であった(拙著「山形最上家と古河土井家について」拙論「古河城下における鮭延氏の家来動向について」山形県地域史研究四〇号)。

さて、鮭延氏は後嗣をたてなかったことから、跡は土井家に直参に召し出された家来十四名に託された。それでは古河藩土井家臣が鮭延氏の旧家来に好意的で、彼らに居心地が良かったかといえ、これは全くの別問題であると言える。

というのは、古河藩主土井家の系譜は徳川家三河時代からを継承しており、また家中には近畿圏出身の有力家臣が多

く、当時この地域が国政の中心地、先進地であり、かつ又経済的にも豊かであったことから、これに優越感を持つ家臣が多かったように思われる。反面関東以北は未開地で経済的にも概して豊かではなかったことで、出羽最上郡出身の旧鮭延氏出身の家来などは…土井家家中において一段格下と偏見の目で見られたのではないかと、今日想像している。さらに旧鮭延氏出身の家来達は、土井家内では新参者で特に頼るべき後ろ楯となる有力家臣もなかった。土井家家臣としてまさに真価が問われる時節が到来しつつあったのである。

略歴

早川和見 (はやかわかずちか)

一九五三年 一月九日生
一九七五年 拓殖大学政治経済学部卒業
一九七五年 古河市役所へ勤務
一九九三年一月、新人物往来社主催「第一八回郷土史研究賞受賞(特別優秀)」
「藩祖土井利勝について」月刊歴史読本
新人物往来社 一九九三年 三月号掲載
二〇一三年 古河市役所定年退職
現在 古河郷土史研究会会員
山形県地域史研究協議会会員
専門は日本近世政治史

【主 著】

○山形最上家と古河土井家について…その関係諸考察(私家版 昭和六十一年刊)
○藩シリーズ古河藩(現代書館 二〇一一年刊)



鮭延家の守本尊「聖観音立像」(鮭延寺所蔵)

義光はなぜ「虎将」と

こしよ

呼ばれてきたのか

胡 偉権

御存知の通り、最上義光は後世に「虎将」と呼ばれている。しかし、そのきっかけは何だったのだろうか。

江戸時代晩期の儒者・塩谷岩陰に「山形従役詩」という詩集の中に義光を偲ぶ「雑詠(二首)」がある。そこに「散步時尋虎将蹤(散歩して時に虎将の蹤を尋ぬ)」と、義光のことを「虎将」と称するわけである。その理由は、義光の官途と関係するものである。

義光は慶長十六年(一六一四)三月に従四位下左近衛少将に叙任された。左近衛少将とは内裏内の警衛、警固を担当する令外の官、いわゆる「六衛府」の中の左近衛府の次官である。むしろ、戦国時代になると、官途の実際の意味を持たず、単なる名譽的なものに過ぎないというまでもない。

さて、この「左近衛少将」と「虎賁郎将」との関係といえば、「虎賁郎将」は「左近衛少将」の「唐名」なのだ。「唐名」とは律令制の官職・部署の名前を、同様の職掌にあたる中国の官称にあてはめたものである。

「虎賁郎将」はもともと「虎賁中郎将」

の略称であり、その起源は少なくとも中国の西周時代までさかのぼることができる。その後、前漢の元始元年(西暦一年)に官職として定着されるようになった。

もともと、「虎賁」とは古代中国において勇士の代名詞であり、「虎賁」の語源を尋ねると、そもそも「賁」とは「奔る」、「勇む」意味で、「虎賁」とは虎が獲物を猛襲する姿を指すものである。後に戦場で敵を果敢に攻撃する兵士の姿を、虎が獲物を襲う雄姿に喩えて転用されるようになったのである。

そして、官職としての「虎賁郎将」の由来を調べれば周王朝の開国功臣・周公旦(しゅうこう・たん)の著書『周礼』(しゅうれい)に初めて「虎賁」の語が見られる。それによると、遙かなる夏の時代に、「虎賁氏」

卷三十一		小子	羊人	司燧	掌固
		司獸	甸人	環人	
		犀壺氏	射人	服不氏	射鳥氏
		霰氏	掌畜		
夏官		司士	諸子	司右	虎賁氏
		旅賁氏	節服氏	方相氏	大僕
		小臣	祭僕	御僕	隸僕
卷三十二					
夏官		弁師	司甲	司兵	司戈盾
		司弓矢	繕人	司馬	司右
		齊僕	道右	大馭	戎僕
		齊僕	道僕	田僕	馭夫

『周礼』の類本の目録に「虎賁氏」が見られる

- (1) 王様が親征、あるいは外出の時、王様に扈從し、その安全を守ることに外を警備すること
- (2) 王様が崩御した後、万が一に備えて、葬儀が終わるまで王宮への各口を警戒し、王様の棺が納められた車を御陵に着くまで守ること
- (3) 崩御のお知らせを各地に伝達する使者と同行すること
- (4) 『周礼』の記事を裏付ける史料はほとんどないため、その真偽を問うことができないが、前漢の平帝は従来の王宮の宿衛部署である「期門郎」を「虎賁郎」に名を改め、その長官として「虎賁中郎将」を設けた。それをきっかけに、「虎賁中郎将」は官職として歴史に登場するようになり、唐の時代まで存在していた。

このように、古来の「虎賁氏」と後の「虎賁郎将」の職務は王様の身柄を守ることであり、いわば王様の親衛隊、精鋭中の精鋭部隊を引率する筆頭といえよう。また、「虎賁中郎将」とも関係する「虎賁」は漢の時代以降、「羽林(うりん)」と共に、帝国の最精鋭部隊の代名詞として史書に随所に見られる。やや煩わしいかもしれないが、「虎賁中郎将」は官職の名で、「虎賁」はそれに従える兵士、あるいは「虎賁中郎将」その人を指す呼称、とお分かり頂けば幸いである。

したがって、「虎賁中郎将」も「左近衛少将」も、王様、日本といえれば天皇の警護役を担当する役職であるため、左近衛少将に叙任される義光も当然、日本版の「虎賁中郎将」となるのである。

また、上述したように、「虎賁」は勇猛の兵士を意味するから、その長官の「虎賁中郎将」最上義光は、あの長谷堂の戦いで最上勢を率いて、撤退中の上杉勢を追撃し、敵の侵略から領国を守るために奮戦することを偲べば、まさに雄々しく獲物を猛襲する虎ではなからうか。

蛇足だが、従四位左近衛少将は最上氏歴代当主の中でも最も高い官途なのである。そのためか、義光は「左近衛少将」に叙任されてから慶長十七年に没するまで、しばしば「少将出羽守」、「少将」を署名として使っていた。彼本人もよほど気に入ったようだ。

義光会だより

No. 6
2016年3月



顔字 齋藤蕉石

新たな甲冑を活用して

〜甲冑体験〜

平成二十七年年度、歴史館に大人用三領・子供用三領の甲冑が増領されました。これは、夏・冬休みの親子歴史講座と義光公命日記念イベントという歴史館の新たな事業に活用され、義光会も全面的に協力を行いました。

夏・冬休み親子講座は、子どもの甲冑体験を内容に加えて、当時の様子を知識だけでなく体験からも感じてもらいました。座学では「義光公を色で表すと何色？」をテーマにして、親子で考えてもらえるようにしました。初めて歴史館を訪れたという方もおり、歴史館や義光公を知ってもらおうきっかけになったのではないかと思います。

命日記念イベントでは、親子で甲冑を着用してもらい、そのなりきりぶりを写真コンテストで表現。義光会では甲冑の着付けと撮影のサポートをしました。女性用甲冑も揃ったため母子での参加もあり、華やかな雰囲気イベントとなりました。

両事業ともた

くさんの申し込みがあり、講座に至っては急ぎよ回数を増やすなど、市民の方々の関心の高さがうかがわれ



親子歴史講座

ます。座学・館内案内・複数交代の着付けはかなり大変でしたが、参加した方々が笑顔で帰られるのを見ると充実感がわいてきました。今後もこのような歴史館事業のサポートを行い、市民の方々に義光公の事績・人となりに関心を持っていただけるようにしていきたいものです。

新たな甲冑を活用して

〜武将隊出陣!〜

今まで、義光会では市や歴史館のイベント等に三領の甲冑を活用してその事業を盛り立ててきました。今回さらに三領の甲冑が揃ったことで、より武将隊らしくなり、多くのイベントで歴史館をアピールできたと思っています。特に、十月に開催された「山形まるごとマラソン」では、市役所前でランナー達に声援を送りました。六名の武将隊と陣太鼓での声援に、手を振ったり中には「ヨシアキ!」と声をかけていくランナーもいて、義光公が市民に浸透してきていると感じました。また、次の週に行われた「街なか賑わいフェスティバル」でも、多くの市民の方とふれあい、パネル展示等で普段歴史に興味のない方にも関心を持っていただく機会になっ

たと思います。



市民マラソン

今年で義光会はサポーター団体として活動を始めてから十年を迎えます。これまでの活動で義光公を県内外の方々に広く知っていただくことができましたと考えています。今後はさらに、義光公が市民に深く親しまれる存在となるよう、館内案内はもちろん歴史館のサポートにも積極的に携わっていきたいと思います。

茨城県古河市へ「鮭延越前秀綱」の菩提寺を訪ねる!

平成二十七年十月二十六日、義光会現地研修として古河を訪ねました。それは、古河市歴史博物館で「佐倉・真室川・大野、歴史と文化で結ばれた町」として、鮭延越前秀綱関連の企画展が開かれているからです。

九月十二日、事前学習として石川藤男氏より題して「鮭延越前秀綱から学ぶ事」を講演して頂きました。現地研修参加者は、三十四名(会員・三十一名、歴史館・三名)です。当日は、快晴に恵まれ五時四十五分の早朝にも関わらず、全員笑顔で出発。古河まで片道四時間の長旅です。車中、再び石川氏より古河及び山形に関係する「新井白石」について一部紹介して頂きました。古河には、予定時刻に着、現地ボランティアガイドのお二人が出向かえてくれました。

早速、館内で早川和見氏より「最上家浪人と土井利勝について」講演をして頂き、鮭延秀綱の佐倉・古河での足跡、最上家改易に絡む事など



現地研修会

お話しして頂きました。

つづいて永用学芸より企画展を丁寧に案内して頂き、義光歴史館貸出の「長谷堂合戦図屏風・右隻」が懐かしく感じられました。

昼食は、博物館近くの「和食・丘里」で静御膳です。

午後は、現地ガイドによる「鮭延寺」「正定寺・土井利勝の菩提寺」をそれぞれ案内して頂きました。中でも鮭延寺の平成元年六月一日、総和町と真室川町姉妹都市記念樹「梅の木」が印象的でした。

又、車窓から見た古河城土塁跡・本丸跡は、大規模な河川改修工事が行われ当時の面影は見られませんでした。十五時四十分、古河を離れ、時間に追われた日帰り研修でしたが、車内は「きみまる漫談」で大爆笑。疲れを忘れさせる、たのしい楽しい十四時間の長旅現地研修でした。今後は、研修で学んだ事を「館案内」に生かして頂ければと思います。

編集後記

二十七年年度、山形市と最上義光歴史館の計らいで「甲冑」が一般用三領・子供用三領、新たに揃えて頂きました。これで一般用計六領(女性一領)となります。戦国武将六人が揃った甲冑姿は、見事なものです。恥ずかしいかな、一人の武將に五人の足軽が就き、軍事パレードする様子を「夢」に描いてしまいました。そんな将来を見据えて活動する日々です。

又、多くの子供達にも「甲冑」を体験して欲しいし、企画に応募して欲しいです。歴史は、「見て・聞いて・感じる」そして、行動することです。

(鈴木 勝)

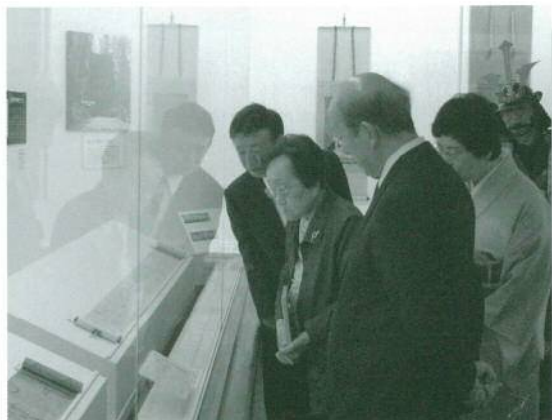


現地研修会

○平成27年度事業スナップ



○最上義光命日記念イベント「親子甲冑体験講座 ～ヨロイ・カブトを着てみよう!! これでキミも戦国武将だ!!～」
親子で甲冑を着て、館内で写真撮影をしました!!



○最上勢津子様が来館されました(4/21)



○義光会「現地研修会」(10/28)
最上家旧家臣鮭延秀綱の菩提寺鮭延寺(古河市)にて



○普化宗尺八山形臥龍会による
虚無僧姿の演奏会(4/19)

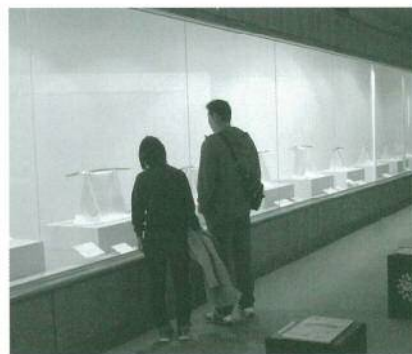
※最上義光歴史館の最新情報は
公式ホームページをご覧ください。
<http://mogamiyoshiaki.jp>



○日本美術刀剣保存協会山形支部
峯田支部長の日本刀講座(3/26)



○特別展「山形大学附属博物館の掛軸展」～幸せを願う絵画～
山大博とのコラボ展第二弾!! キャプションの作成から展示作業…
そしてギャラリートークまで学生さんたちが参加した展覧会です



○今年の宝モノは日本刀!!
企画展「市民の宝モノ2016」
～日本美術刀剣保存協会山形支部～

もう一つの山寺

リサ・ソマーズ

山形に来て二年目、2011年～12年の一年間、山寺の芭蕉記念館に翻訳業務で務めました。市内から山寺までの通勤はなかなか贅沢で、大森トンネルを抜けて右に曲がると目の前に現れる山寺の山々、そして記念館の駐車場に車を止めると、朝の「閑さ」のなか向こうに一望できる立石寺の絶景。

今も山寺の景色にはほれほれしますが、最近では違う目的地に足が向うようになりました。町中を通過して、芭蕉記念館も通り過ぎ、もうしばらくニキロほど直進してから左側の林道に降りて「旧奥山寺キャンプ場」の駐車場に車を入れます。今度はリュックを背負い、アプローチを20分ほど歩けば、目指す「黒岩」に到着です。

家族・友だち・知り合いの皆知るように、私はここ一年ほど重篤なクライミング病にかかっています。屋内スポーツとしてのクライミング(岩登り)も現在どんどん人気を高めています、やはり外の岩登りには自然界にしかない魅力があります。本物の石の堅さと感触、自然の途方もないスケール、何が起きるかわからないドキドキ感。

私のクライミングもやはり屋内ジムから始まりましたが(この一年間は大部分山形市内のクライミングジムで過ごしたような気がします)、ジム仲間に山寺の岩場に連れて行ってもらったのがきっかけで、外クライミングもするようになりました。

初めてその岩場に行ったときの感動は未だに覚えています。アプローチを経て最初に目に入る岩壁は大きく縦に割れ、聖堂のアーチのような、現代彫刻のオブ

ジェでもあるかのような。「御前岩」というこのエリアの他に、「黒岩」、「みちのく広場」、「直角ハンク」、「仙人掌」、そして「苦四楽岩」があります。1980年代後半に開拓されたという山寺の岩場には先人クライマーたちによるクライミングルートがさまざまあり、それぞれ「ラッキーストライク」、「去り行く夏の日」、「めんそーれ」など、拓いた人が付けた名で呼ばれます。私が山寺で最初に登りきった御前岩の一番左側ルートの名は、松尾芭蕉の知らない「奥の細道」でした。

しかし、なんでこんなに岩登りにはまるのかな？ケガもするし、夏は暑くて冬は寒いし、安全面に気を付けてはいても、やはり怖い。やる気満々でルートを登り始めても、途中で急に力が抜け不思議な脱力感に襲われたこともたびたびあります。「なんで私はこんな絶壁にいるの?」「やはり無理だ。下りよう。」

しかし、そんな弱気な自分を乗り越えるために登っているのでしょうか。山寺の岩壁では、自然は巨大で偉大、悠久なるもので、自分のような人間はいつときだけのちっぽけな存在と感じます。その偉大な岩壁に挑みながら、ちっぽけな自分の限界を少しずつ伸ばせているのかも知れません。

無事登りきると山寺の山が声を掛けてくれる気がします。「ま、弱い人間にしては、今回のルートもどうにか登ることができたね。…けれども、まだまだ始まったばかりだよ。」

Lisa Somers (リサ・ソマーズ) 翻訳者・通訳/山形市在住

平成27年度事業

展示事業

企画展 《1月20日～4月5日 前年度から継続》

「市民の宝モノ2015」 《高嶋祥光生誕120年記念》

常設展示Ⅰ 《4月8日～7月8日》

「鐵(Kurogane)の美2015」 《郷土の刀工たち》

肖像画の特別公開 《4月8日～5月17日》

「徳川家康像(光明寺蔵)」 《坂紀伊守像》

「坂重内光重像」

特別展 《7月11日～9月13日》

「山形大学附属博物館の掛軸展」

《幸せを願う絵画》

常設展示Ⅱ 《9月16日～1月18日》

「武将のみやび」 《山形の名作屏風》

企画展 《1月21日～4月3日》

「市民の宝モノ2016」

《日本美術刀剣保存協会山形支部》

普及啓発事業(主な事業)

〇ことも講座

「ヨシアキ☆すく〜る!?」 《山形の殿様、義光公を知ろう!》

講師/最上義光歴史館サポータークラブ 「義光会」

・9月18日 山形市立宮浦小学校 四年生

・10月28日 山形市立第二小学校 四年生

・11月5日 山形市立第七小学校 四年生

・11月11日 山形市立高瀬小学校 四年生

・11月25日 山形市立枝田小学校 四年生

・11月26日 山形市立第四小学校 四年生

・12月1日 山形市立第五小学校 四年生

・12月3日 山形市立金井小学校 四年生

・12月16日 山形市立南小学校 四年生

・12月26日 山形市立第一小学校 四年生

〇受託事業(最上義光歴史館体験型文化振興事業)

〇親子歴史講座

《みんなで学ぼう!!山形の殿様と歴史のひみつ》

講師/最上義光歴史館サポータークラブ 「義光会」

《7月25日、8月1日・8日、12月23日・26日》

〇最上義光命日記念イベント

《親子甲冑体験講座》

《ヨロイ・カブトを着てみよう!!》

これでキミも戦国武将だ!!

講師/最上義光歴史館

サポータークラブ 「義光会」

《1月16日・17日》

《「なりきり★戦国武将コンテスト」

《2月2日・2月14日》



山形城の立地

長谷勘三郎

山形が出羽国の中枢都市として発展してきた背景には、十四世紀の斯波兼頼の入部、以後十七世紀初頭までの最上時代があった。十五世紀などは、史料不足の「暗黒の時代」だが、とりあえず最上氏の存在が山形を支えてきたのではあるだろう。

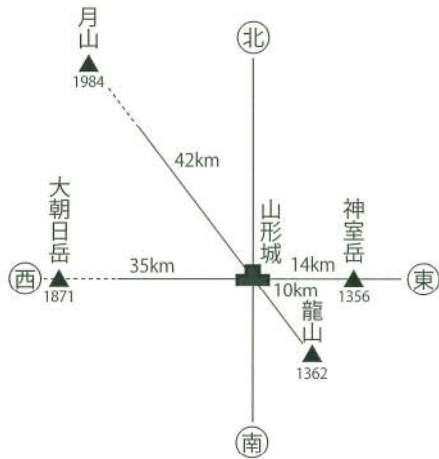
それなら、山形城がなぜこの場所につくられたのか。

高橋信敬先生の名著『最上時代山形城下絵図』では、斯波兼頼入部時代の近辺の地勢や歴史的な沿革には触れておられるが、「なにゆえに、この場が選ばれたか」についての所見は、残念ながらない。

先頃、中川重先生、伊藤清郎先生と一緒にしたとき、「風水」ということについておたずねしたことがあった。「山形城の風水(学的)立地はどうなんでしょう」という私の質問に、お二方は町づくりにおける「山あて」の事例を教えてくださいましたが、「風水」についてはお話しにならないかった。學術の網に掛かりそうもない(?)「風水」を取り上げるのはお避けなさるのが当然と、私は納得をもらったのだったが、その後も山形城の位置・立地は気にしていた。

山形県の地図を広げて、眺めて、今のところ次のことは確かかなようだ。

① 山形城の位置は、北西四二kmに見える月山の頂上(一、九八四m)と、南東一〇kmにそびえる龍山(一、三六二m)の頂を結ぶ直線上にある。「直線A」この二つの山は、山形城から見て一番高く目につく。



② 山形城の位置は、西(三三五km)の朝日岳の頂(一、八七一m)と東(一四km)の神室岳の頂上(一、三五六m)を結んだ線上にある。「直線B」。この両山は、めだたぬながら、山形城の真東、真西にある最高の峰である。

③ つまり、直線AとBの交点が山形城の現場に当たるわけである。標高一三〇m前後。水はけよく乾いた平地地下水は豊富。所々に泉が湧いている雑木林。積雪は山形盆地のなかで最も少ないところ。人が暮らし集落を形成するには具合がいい。このあたりの条件は、誰でも気がつきやすい。

しかし、山形城が周辺の山岳(等)と関係づけて築かれたかとなると、私には何も言えない。もう一つ、山形の随所で遠望される雁戸山(一、四八五m)は、無関係なのか。どうなのだろう。

平成28年度事業

1. 展示事業

(1) 特別展・企画展

① 「仮称」山形大学附属博物館の名品展 (7月9日-9月11日)
山形大学と連携して大学の附属博物館の収蔵品を学生が選定し、企画から展示まで学生が参加する展覧会です。

(2) 「市民の宝モノ2017」展(継続企画)

(1月25日-4月)
山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して、歴史館で展示して展示し、広く一般に公開する市民参加型の展覧会です。

(2) 常設展示

最上義光を主とした最上家関係資料と山形城関係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながら下記のテーマで一部コーナー展示を行います。
① 「武士」(Warrior)の晴れ姿「最上屏風と合戦図」 (4月6日-7月6日)
② 「仮称」最上家とみやびの文化」 (9月14日-11月22日)

2. 普及啓発事業

(1) 歴史講座

① ことも講座(小学校出張講座、親子講座)
山形市内の小学校に出向いて最上義光を学ぶ機会をつくることや、歴史館を会場にして親子で歴史を勉強する機会をつくることによって郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心の育成を図ります。

(2) 記念イベント

最上義光の命日(1月18日)にちなんだイベントを実施します。親子で義光を学び、甲冑の着用体験や記念撮影を行います。

(2) ボランティアに係わる事業

最上義光と最上家を啓蒙することについて歴史館とともに活動する市民が、ボランティアという形で歴史館のサポーターとなつて、来館者の多様化するニーズに応え、きめ細かなサービスの提供を図るとともに、歴史館を核としたコミュニティを創出します。(年一回サポーターを募集します)

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

表紙の写真

「親子歴史講座・みんなで学ぼう」

山形の殿様と歴史のひみつ(写真七月二十五日開催時の様子)

今年度、受託事業として、最上義光歴史館体験型文化振興事業を実施しました。その中で、大人用と子ども用の甲冑を購入し、体験型の親子講座を行いました。義光のメンバリーが講師となり、義光の功績や郷土史への理解を深めた後、義光や政宗の甲冑を着用しました。重さ約七・五kgの甲冑に、子ども達は驚き、苦戦しながらも楽しんでいました。夏休みと冬休み、合わせて四七組延べ一〇八人が参加し、郷土の武将への関心を深めていただくことができたと思っております。

また、同事業では写真での親子講座の他、一月十六日・十七日に最上義光命日記念イベントとして、親子で鎧兜を着用し、戦国武将になりきるイベントも開催されました。両事業とも、多くの方に楽しんでいただき、大変賑わいのあるものとなりました。

ご利用について

開館時間 午前9時から午後4時30分
入館料 無料
休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日)
12月29日から1月3日
交通 J R山形駅より徒歩約15分
大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成28年3月発行
編集・発行 公益財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-1004
山形市大手町1-153
☎023-16225-1153
☎023-16225-17101
☎023-16225-17102
http://moganhiyoshiaki.jp

印刷 株式会社大風印刷

